

開催地名：愛知県蒲郡市	
開催日時	令和元年 11 月 5 日（火） 13：30 ～ 15：00
開催場所	蒲郡市役所
語り部	佐々木 守 （岩手県釜石市）
参加者	蒲郡市職員 約 80 名
開催経緯	市の職員の防災意識向上と、避難所運営に関して防災課職員以外の職員が住民と協力して行うために、職員に具体的なイメージを持ってもらうことを目的として開催することとする。
内容	（１）はじめに 三陸沖、深さ 24 キロメートルを震源とするマグニチュード 9.0 の地震による津波が、岩手県釜石市を襲った。語り部は震災当時、釜石市の防災課長を務めていた。釜石市全体で 888 名の死者、152 名が未だ行方不明となっている。震災前年のチリ地震の際に、大津波警報が発令（3 メートルの津波）されたが、結局津波は到達しなかったことから、この震災でも「どうせ津波は来ないだろう」という過信により、このような被害を招いたものだと考えている。 （２）震災当日の実際の様子 私は、「強い揺れのあとには必ず津波が来るから、とにかく逃げろと呼びかけろ」と防災無線経由で何度も指示を出した。しかし、前述のように、市民の多くは逃げなかった。あまりの津波の威力に世界一の防波堤も決壊して、町にあるものすべてが流されて、綺麗な海岸も無残な姿になってしまった。（釜石市内海岸部はほぼ全滅状態）地震直後に役所内に設置した災害対策本部は津波で壊滅状態になったため、別の場所へ移し、自家発電にて緊急会議を行った。避難所も全く同じ状況で寒々しかった。 自主防災計画や地域防災計画を立てても実際には何の役にも立たなかった。これは計画になかったことが次々と出てきてしまったことによる。例えば、800 体も遺体が出て、それを運んで収容・安置し、火葬まで行なうことになったのだが、誰もこのような状況を想定していなかったため、非常に苦労した。他にも、救援物資が来るのは良いが、それを効率よく、公平に分配するのに想像以上の労力が必要になるなど、想定外の問題が山積した。（災害時には想定外のことが起きることを覚悟する必要がある） （３）災害時における行政職員としての災害対応 ・ライフライン全滅、庁舎が機能不全の中での情報収集と周知活動 ・次々に出てくる課題への待ったなしの対応 ・勤務時間内での災害（職員 5 名が死亡）、職員も被災者（約 3 割）

- ・当初は不眠不休、過重勤務、マンパワー不足、業務の増大、複雑化
- ・災害対策本部の機能不全
- ・想定していなかった業務の増大への対応
- ・外からいろいろな団体、人が入ってくることへの対応（マスコミ、ボランティア等々）

（４）さいごに

事前の取り組みの重要性、これに尽きると思う。私たち釜石市は事前の取り組みが甘かった。防災への危機意識に基づいた事前準備の不足、災害に強いインフラの整備、避難誘導體制の構築、実態に沿った訓練や筋書きのない訓練等々、取り組みが不足していた。取り組みの充実のためには、行政だけでなく、住民の意識を変えていくことが必要である。率先して避難をしないと命を助けることはできないので、そういう取り組みを徹底させていくことが必要だと痛感している。平时にしっかりとした防災教育を行い、他市町村や消防、民間企業等との広域での連携や、災害弱者対応への取り組み等を、しっかり行なっていただきたいと切に思う。そして、災害で受けた被害を単なる「経験」ととどめることなく、「歴史」として語りついでいくこと、残していくことが、後世の住民の財産となると思う。



開催地より

東日本大震災時に市の職員として、先頭に立ってご対応された語り部の言葉には重みがあり、それが我々にひしひしと伝わってきた。行政職員としての対応、災害への備えについて、本当に考えさせられた。